

オプション教材は勉強に余裕があるときに取り組んでいただく教材です。

オプション教材ウツギ 読解マラソン集

ウツギ

読解問題のもとになる長文です。読解問題をやる人は、時間のあるときに読んでおきましょう。

読解問題は、清書の週で時間があまったときにやってください。時間がないときは、やらなくていいです。

読解問題は、選択式問題の解答のコツをつかむために行います。適当に全問やるのではなく、一問か二問でもいいですから確実に正解にするつもりでやってください。

読解問題の答えを作文用紙に書く場合は、問題の番号と答えがわかるように書いてください。書き方は自由です。読解問題の用紙は返却しませんが、選んだ番号と正解は「山のたより」に表示されます。

読解マラソンの問題のページから答えを送信すると、その場で採点結果が表示されます。（この場合、作文用紙に答えを書く必要はありません）

▼作文用紙に答えを書く場合（書き方は自由です。
作文用紙の余白などに書いても結構です）

▼読解マラソンのページから答えを送信する場合（この場合作文用紙に答えを書く必要はありません）
<http://www.mori7.net/marason/ki.php>

1.

2.

3.

4.

5.

ヘレンは一歳半のころ、重い病気で、目が見えなくなり、耳も聞こえなくなりました。声を出すことはできましたが、他の人の話が聞こえないため、正しく話すこともできませんでした。そのため、人に思っていることをうまく伝えられずに、毎日癩癩をおこしてはあばれ、まるで動物のように手づかみでものを食べるというような生活ぶりでした。家族の人たちは、いったいこの子は将来どうなってしまうのだらうと、胸がつぶれる思いでした。

ぼかばかとおひさまがほほえむ四月のはじめ、運命の日がやってきました。サリバン先生は、庭の井戸から水をくみ、ヘレンの手をとって、そのつめたい水をかけました。

ヘレンはおどろいて手をひっこめました。その手をまたとって、サリバン先生は水をかけました。何度かそうするうちに、ヘレンは気持ちよさそうに、手をのばしたままにしました。そこで先生は、ヘレンの手のひらに指でこう書きました。

「w a t e r」

ウォーター、そう、水のことです。ヘレンは不思議そうな顔をしています。そこで、サリバン先生はもう一度、その手に水をかけました。そして、すぐにまた、「water」と書きました。ヘレンは、考えているようです。さらに先生が、ヘレンの手に水をかけたところ、ヘレンがうなずいたのです。すかさず、先生は「water」と書きました。すると、ヘレンが、先生の手を探りあて、同じように何かをその手に書こうとしました。

「わかってくれたのね」サリバン先生は、胸の高鳴りをおさえつつ、ヘレンの手をとり自分の顔に持って行き、ほおをなぞらせたあと、くちびるにあてがいました。それから、ゆっくりとそしてはつきり、発音しました。

「ウ、ウォーター」

もう一度、言いました。

「ウォーター」

すると、ヘレンもまねをするようにくちびるを少しうごかしました。息とも声ともつかないかすかな音がヘレンの口から出ました。

この日のことをサリバン先生は一生忘れなかったでしょう。目が見えず耳も聞こえず、口もきけなかったヘレンが、生まれてはじめて言葉にふれた瞬間です。ヘレンは、服をびしょぬれにしながら、何度も水にさわリ、先生の手をとって、文字らしきものをその手に書き、くちびるを動かしました。サリバン先生も、よろこびの涙と水でぐしゃぐしゃになりながら、「ウォーター」「ウォーター」と繰り返すのでした。

言葉の森長文作成委員会 (㊟)



急いで食べると、食べ物がのどにつまり、せきこんでしまうことがあります。私たちののどのおくは、二つの道にわかれています。ひとつは、鼻や口から入った空気の通る道、もうひとつは、食べ物を通る道です。空気の通る道は気管とよばれ、のどの前の方にあり、空気はそこから肺へ送られます。食べ物の通る道は、食道と呼ばれ、後ろのほうにあり、食べたものはそこから胃に送られます。

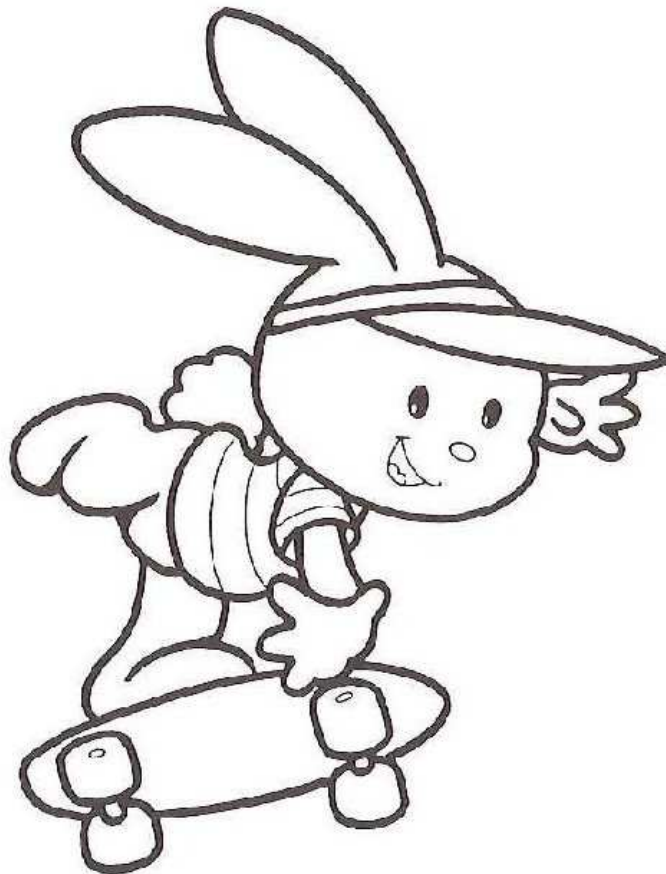
食べ物、のどのかべにあたると、空気の通る道は反射的にふさがれて、食べ物の通る道だけがあきます。まるで、手旗信号で「赤上げて。」「白上げて。」とやるように、「食べ物だ。」「次は空気だぞ。」と、弁を開きます。だから、急いで食べると、「赤上げて、白上げて、赤上げないで、白下げない。」などという命令になって、弁がまちがえてしまうことがあるのです。

きちんとかんで、唾液が十分まざっている食べ物は、食道の動きによって胃に送られます。しかし、大きいままのものや、よくかんでいない食べ物は、二つの道のわかれるところにつまってしまうことがあります。歯の生えていない赤ちゃんやかむ力の弱いお年寄りが、流動食といって、水分が多く柔らかいものを食べるのはこのためです。

食べ物のどにつまった時は、背中をたたいてももらったり、それでも取れない場合は指をつつこんで取ってもらったりします。空気の通る道をあけてやるためです。いずれにしてもすばやい対処が必要となります。最近では、とつさに掃除機を使って、おばあさんがのどにつまらせたおもちを吸い込んで取った例もあるそうです。

空気と食べ物の区別のように、体が自然に動作する似たような例として、イルカやクジラの鼻があります。イルカやクジラは水中に入ると、自然に鼻の穴が閉じるので、水が入りません。

ことば もりちようふんそくせいいいんかい
言葉の森長文作成委員会（㊟）



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

牛乳から生まれたチーズは、今では世界中で食べられており、その数は千種類にものぼるそうです。わが国でも、小さな子供からお年寄りまで、手軽なカルシウム源として用いられ、スーパーマーケットなどには必ず売られています。ワインととても相性がよいチーズは、日本でも研究が進み、日本製のチーズもフランスなどの本場のものにひけをとらなくなりました。風味がよく牛乳より保存がきき、持ち運びに便利で栄養豊富なこの食べ物実は、偶然発見されたもののなのです。

古いアラビアの民話にチーズ発見のつぎのような話が残っています。発見者は古代オリエントの商人です。砂漠を旅する商人は、羊の胃袋を干して作った水筒にヤギの乳を入れ、それをラクダにくくりつけて、暑い中を歩いていました。夕方、のどがかわき、乳を飲もうとしたところ、中から黄色い水と白いかたまりがでてきました。それを食べてみたら、とてもおいしかったそうです。これがチーズの始まりといわれています。古い牛乳が出てくると思っていたら、不思議な白いかたまりがころんと出たのですから、まさにひょうたんからコマ、商人はさぞかし驚いたことでしょう。

現代では、原料の乳を乳酸菌などを使って発酵させたあと、水分をぬいてかためて作ります。ここで使われる乳酸菌は生きているので、時間がたつと変化が起き、味わいが変わっていきます。白カビや青カビにおおわれたチーズなどもあり、そのおいしさにやみつきになる人も多いようです。

発酵を使った食べ物には、ほかに納豆があります。昔、武士が戦っているときに食糧がなくなり、近くの農民に煮た大豆を出させたことがありました。しかし、急いでいたので入れ物が間に合わず、農民は俵につめて武士のところに持っていきました。その俵につめた煮大豆が、二、三日たつと何と納豆になっていたのです。

最初、大豆が腐ってしまったと思い、しぶしぶ口にした武士も、食べてみてそのおいしさに驚いたことでしょう。
言葉の森長文作成委員会(㊄)



大きな赤いハサミを持ったアメリカザリガニは、子供たちに人気があります。このアメリカザリガニは、名前のとおり元々はアメリカで暮らす生き物でした。昭和の初めごろ、食用ガエルだったウシガエルの餌にするために、わざわざ海の向こうのアメリカから買われてきたのです。

「ウシガエルに食べられるなんてまっぴらだ。」

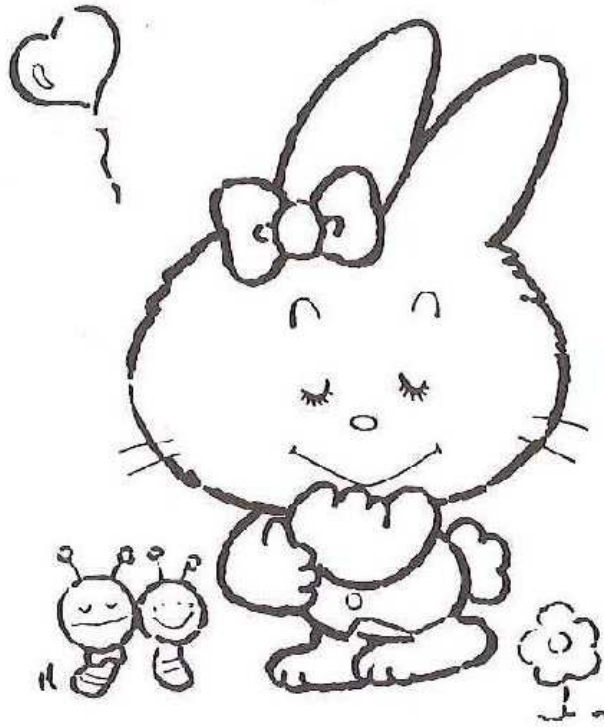
きつとそんな考えをもったアメリカザリガニたちがいたのでしょうか。カエルに食べられるぐらいならもう帰るとばかりに、近くの川や池に逃げ出し、そこで子供を生み、あつという間に日本中に広がりました。それだけ生きる力が強い生き物だったのです。それもそのはず、アメリカザリガニはなんでもムシヤムシヤと食べてしまうし、少しくらい汚れた水の中でもへっちゃらなのです。もし、アメリカザリガニがグルメできれいだったら、今ごろ日本には生息していなかったかもしれません。

さて、立派なハサミを持つアメリカザリガニは、他の生き物はもちろん、仲間同士でもよくケンカをします。そんな時に足やハサミが取れてしまうことがあります。さあ、大変です。でも、心配はいりません。何度か脱皮をしていくうちに足やハサミは元のように戻ってしまいます。まるでしっぽを切られたトカゲのようです。

エビやカニの仲間には、このように優れた再生能力を持つものがあります。もちろん人間にも、ちよつとした怪我なら元のように直してしまう力が備わっています。

アメリカザリガニは、仲間同士でもケンカをしてしまいますから、たくさんつかまえたときは、全部うちに持って帰らずに、川へ返してあげましょう。

言葉の森長文作成委員会 (c)



梅雨の季節になるとよく見かけるカタツムリ。まるでシャワーを
 楽しむように雨の中をのんびりと散歩しています。カタツムリは虫で
 はありません。海に住む貝の仲間なのです。昔々、カタツムリは水
 の中に住んでいました。ですから、陸に上がって生活するようになった
 今でも、雨の降る日が大好きなのです。からつとさわやかに晴れた
 日や暑い日は大の苦手です。しかし、殻があるから、からからに乾い
 てしまうことはありません。暑い日は、木の葉や草の陰に隠れてじつ
 としています。梅雨の季節にあればよく見かけることができたカタ
 ツムリが、夏になるとすっかり消えてしまうのはそのためです。カエ
 ルやヘビが冬眠するように、カタツムリは夏のあいだ、ひたすら眠り
 続けます。そして秋になり雨が多くなつてくると、眠りから覚め、
 活動を開始するのです。

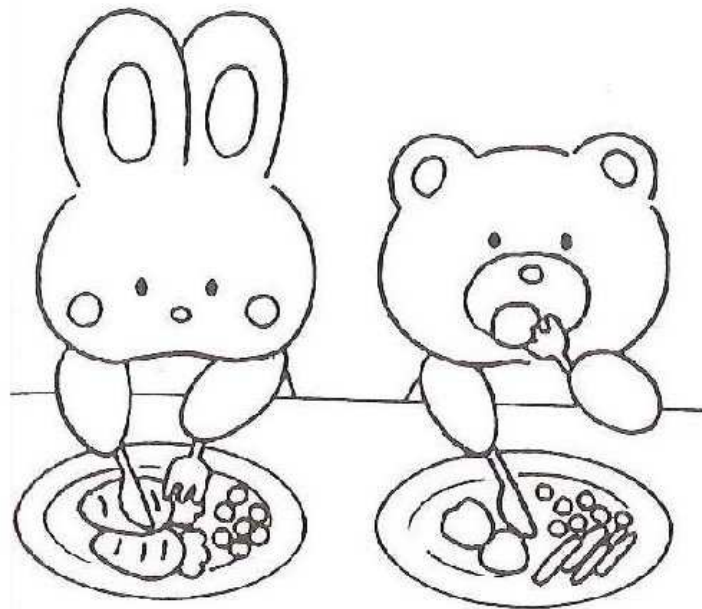
動物や昆虫にはオスとメスの区別があります。けれども、カタツ
 ムリにはオスもメスもありません。一匹のカタツムリがオスの役目と
 メスの役目をするのです。だから、どのカタツムリも大人になると
 卵を生みます。一回の産卵で二十個から六十個の卵を生みますが、
 一つの卵を生むのには十分から二十分もかかります。卵からかえつ
 たカタツムリの赤ちゃんは、生まれたときから殻があります。

ことば もりちようぶんさくせいいいんかい
 言葉の森長文作成委員会 (E)



画用紙と色鉛筆を手渡され山の絵をかくようにいわれたらほとんど
の人が緑色の山の絵をかくでしょう。一面を緑色の木でおおわれて
いるのですから、たしかに山は緑色です。しかし、秋になるとまる
ですてきな衣装をまとったかのように、山は赤や黄色に色づいてきま
す。これを紅葉と言います。紅葉が美しいことで有名な山は、たくさ
んの人でにぎわいます。紅葉狩りという言葉は耳にしたことがありま
せんか？ 美しく色づいた木や山を楽しむということです。山に
出かけなくても公園や街路樹の木も美しく色づきます。真っ赤なも
みや黄色のいちようなど、みなさんも見たことがあるはずで
す。では、どうして秋になると木の葉の色が変わるのでしょうか？ 此
は冬になって葉を落とすための用意をしているからなのです。
木には、冬に葉の落ちる落葉樹と冬に葉の落ちない常緑樹とがあ
ります。冬に葉の落ちる木は、夏の日差しが強いときは光のエネルギー
ギーでたくさんのおおきい葉を作ります。しかし、冬になって日差しが弱く
なると、栄養を作るよりも、乾燥や寒さから身を守るために葉を
落とすのです。落葉樹は、「冬になったら、葉を落としたほうが楽よ
う。」と思っているのでしよう。
葉の緑色の部分は、光を栄養に変えるところ。落葉樹は、葉
を落とす前に、だんだんと緑色の部分を少なくしていきます。その
ため、黄色や赤といった緑色以外の成分が顔を出してくるのです。
木の葉が美しく変身するには、昼間の気温と夜の気温の差が大きい
ほうがよいそうです。また、空気が澄んでいて葉に十分な日光が
あたることも大切な条件になります。

言葉の森長文作成委員会 (E)



インドという暑い国にカルカッタという大きな町があります。この国は貧富の差がとても大きい国です。つまり、お金持ちは気が遠くなるほどの財産を持ち、貧しい人々は、今日食べるものにも困ってしまふという具合です。そんな豊かな暮らしを送っているある家に、若い男の子がいました。毎年、その子の誕生日がやってくると、家をあげての盛大なパーティーが繰り広げられます。そして、たくさんプレゼントがこの子に贈られるのでした。

ある年の誕生日のことです。

「今年はどんなプレゼントがほしいの？」

とたずねられたその子は、お父さんの目をじっと見つめてこう言いました。

「ぼくは何もいらないんだ。パーティーをするお金やプレゼントを買うお金を全部、マザー・テレサのところにあげてください。貧しい人たちを助けたいんだ。」

はつとした両親は、この子連れてマザー・テレサのもとをおとずれ、お金の入った封筒をさし出しました。両親はこの男の子からとても大切なことを教えてもらったのでした。

地球上の貧富の差は、なかなかなくなりません。しかし、もし、

ある人が自分の幸せをほかの人に少し分けることができ、そして、その人もまた自分の幸せをほかの人に少し分けることができたらどうなるでしょう。分けられた豊かさは次々と広がっていき、やがて地球上から貧しさはなくなっていくでしょう。

言葉の森長文作成委員会 (E)



この水族館でも人気のショーといえば、イルカのショーでしょう。水の中を気持ちよさそうに泳いでいるイルカは、実は魚の仲間ではありません。私たち人間と同じほ乳類と呼ばれる生き物なのです。私たちは水の中で呼吸をすることはできません。それと同じように、あれほど自由自在に泳ぎ回れるイルカも、水の中では呼吸ができません。イルカの頭の上には噴気孔と呼ばれる小さい穴が開いています。イルカは、私たちの鼻の穴のように、この穴をつかって呼吸をしているのです。

イルカは、昼間起きているときには、一分間におよそ六回、水から頭を出して呼吸をします。そして、眠りにつく夜は、昼間のほぼ半分の二回から三回呼吸をします。ですから、水面に近い浅いところをゆつくりと泳ぎながら寝ているのです。

けれども、餌をとるために深くもぐる必要があるときなどは、十五分くらいの間は息を止めていることもできます。

生物は昔、海から誕生しました。魚のひれが足になり、地上を歩き回る生物になりました。イルカの先祖も、大昔は、地上を歩いていたのでしょうか。それがなぜか「やっぱり海にいるか。」と、再び海に戻り、自分の手足を泳ぐのに適したひれのような形に変えていきました。海に戻ったイルカが今どんな気持ちでいるか、聞いてみたい気がします。

言葉の森長文作成委員会 (E)



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01



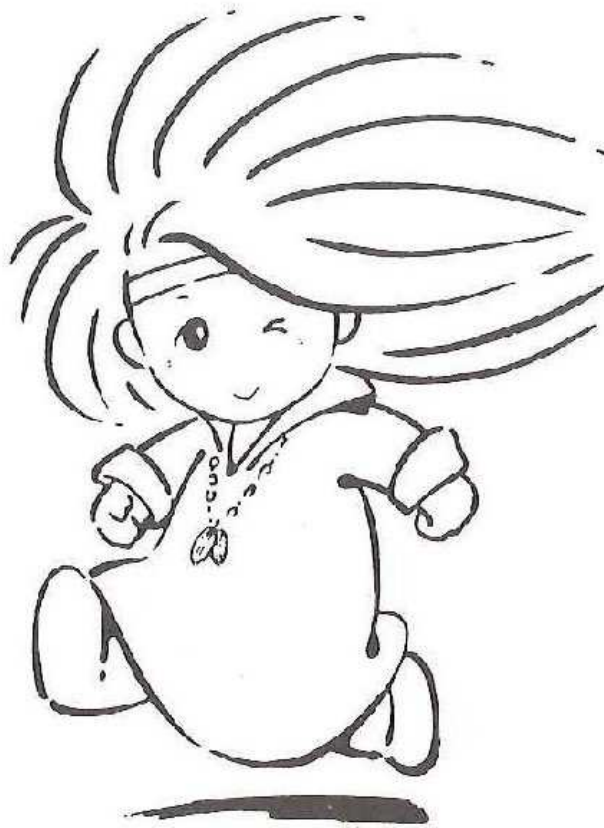
カタツムリとナメクジは、どちらも巻き貝のなかまで、大昔、海に住んでいました。海に住んでいたころは、ナメクジにも殻があったのですが、そういうわけか、ナメクジは殻を捨ててしまいました。もっと身軽になりたいと思つたのかも知れません。カタツムリは、海に住んでいたときのまま、今でも殻をつけています。殻のないナメクジは、水気のないところではからからになつてしまいます。一方、カタツムリは、雨が降るまで、殻の入り口に膜をはって待つことができます。

カタツムリの殻は、ヤドカリのようにだれかにもらつたものではなく、生まれながらに身につけているものです。この殻は、体からしみ出した石灰分で作られ、体にくっついていてるので、カタツムリの殻と体とを引きはなすことはできません。この殻があるおかげで、カタツムリは、いつでも敵から身をかくすことができますが、ナメクジは、カタツムリのように殻の中にかくれることができないので、夜にしか行動しません。

ナメクジに塩をかけると小さくなつていきます。これは、塩をかけられたことによつて、ナメクジの体の中の水分が外に出ていくためです。塩だけではなく、砂糖やこしでも同じです。ナメクジは、とけていなくなつてしまつたように見えますが、じつさいには、水分がなくなつたために小さくなるだけです。もちろん、そのままにしておくと死んでしまいますが、水をかけてやると、まるで魔法をかけられたように、また元気になります。

もともとは海の中の生き物だつたカタツムリとナメクジ。陸に上がつてからは、殻を捨ててしまつたナメクジの方が苦労が多そうです。歌にも歌われて人気のあるカタツムリに比べると、ナメクジは少し分が悪いようです。ナメクジは、びんぼうくじをひいてしまつたと思つているかもしれません。

言葉の森長文作成委員会(㊦)



「地震、雷、火事、おやじ」は、昔から怖いものの代表としてあげられてますが、最後の「おやじ」は、本来は「大山風」と言っていたもので、台風のとときの強い風を意味していたそうです。自然には、人間の力では太刀打ちできない脅威が秘められています。ここでは、その中の雷に焦点を当ててみましょう。

雷は、まず、雲ができることから始まります。地面や海面近くの湿った空気は、水分をたくさんふくみ、あたたまると上にのぼっていきます。その空気が上昇すると、温度が下がり、水分が積乱雲となります。積乱雲の上の方では更に温度が下がり、水分が氷になります。その氷が雲の中を落ちていくときに、上に向かって空気と激しくぶつかり合ってプラスとマイナスの静電気が発生します。プラスの静電気を帯びた比較的軽い氷の結晶は雲の上のほうに舞い上げられ、マイナスの静電気を帯びた重い氷の粒は雲の下の方にたまります。

雲が大きくなればなるほど電気も強くなり、雲の下の方にたまったマイナスの電気は、地上のプラスの電気を目指して一目散に飛んできます。このとき、とても大きな電流が一度に流れるので、激しい光と大きな音を出します。こういう形の落雷は雷の九十パーセントを占めています。残りの十パーセントの落雷は、雲の上のほうにあるプラスの電気が、地上のマイナスの電気目指して飛んでいく形の雷です。雷にはこのほかに、雲から雲へ飛んでいくものもあります。

雷のエネルギーは、雲の大きさなどによってもちがいががあります。が、およそ五万アンペアにもなります。これは、六〇ワットの電球を八万个以上灯せるエネルギーに相当します。わつとおどろくほどのエネルギーを一瞬のうちに放出しているのです。

昔の人は、雷を、雲の中にいる魔物があばれているのだと思っていたそうです。雷が鳴り始めたら、外には出ずに家の中で魔物の機嫌がおさまるのを静かに待ちましょう。

言葉の森長文作成委員会（一）



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

暑^{あつ}かった夏^{なつ}も終^おわりに近^{ちか}づき、涼^{すず}しい風^{かぜ}が吹^ふき始^{はじ}めるころ、夜^{よる}にな
ると虫^{むし}たちの声^{こえ}が聞^{きこ}えてきます。そ^なな虫^{むし}たちの鳴^なき声^{こえ}は、秋^{あき}の
到^{とう}来^{らい}を知ら^しせてくれます。

生^うまれつ^うき日^に本^{ほん}語^ごを使^{つか}っている人^{ひと}は、自^し然^{ぜん}の音^{おと}を左^さ脳^{のう}で聞^ききます。
左^さ脳^{のう}は言^ご葉^ばを理^り解^{かい}する脳^{のう}です。か^ら、虫^{むし}の音^{おと}も声^{こえ}のよう^{よう}に聴^{きこ}えます。
こ^れに對^{たい}して、英^{えい}語^ごなど欧^{おう}米^{べい}の言^ご葉^ばを使^{つか}っている人^{ひと}は、自^し然^{ぜん}の音^{おと}を
右^う脳^{のう}で聞^ききます。右^う脳^{のう}は音^{おと}楽^{がく}を感^{かん}じ^る脳^{のう}です。か^ら、虫^{むし}の音^{おと}は雑^{ざつ}音^{おん}にし
か聴^{きこ}えないそ^うです。

コオロギ、キリギリス、スズムシ、マツムシ、ウマオイ、カンタ
ン、クツワムシなど、秋^{あき}に鳴^なく虫^{むし}にはい^ろろな種^{しゅ}類^{るい}がい^ます。が、
大^おきく分^わけるとコオロギ類^{るい}とキリギリス類^{るい}に分^わけられ^ます。上^うから見^み
て、右^{みぎ}羽^{はね}を上^うにして鳴^なくのがコオロギ類^{るい}、左^{ひだり}羽^{はね}を上^うにして鳴^なくのが
キリギリス類^{るい}です。「右^{みぎ}」という漢^{かん}字^じの左^{ひだり}半^{はん}分^{ぶん}を消^けすとコオロギの
「コ」という字^じに、「左^{ひだり}」という字^じの左^{ひだり}半^{はん}分^{ぶん}を消^けして、た^たての棒^{ぼう}を
少^すし伸^のばすとキリギリスの「キ」という字^じになり^ます。こ^れが覚^{おぼ}え方^{かた}
です。

コオロギ類^{るい}には、コオロギ科^かやカネタタキ科^かの虫^{むし}がい^ます。キリギ
リス類^{るい}には、クサキリ、クツワムシ、ウマオイなど、た^くさ^んの虫^{むし}が
い^ます。ど^ちら^のの種^{しゅ}類^{るい}も、鳴^なき羽^{はね}を持^もっているのはオスだけ^{だけ}です。な
ぜ^ななら、虫^{むし}が鳴^なくのはメス^めを呼^よぶた^ため^めだから^{から}です。ま^た、自^じ分^{ぶん}の
縄^{なわ}張^はりを他^たのオス^おに知^しらせるた^ため^めに鳴^なくこ^ともあ^りま^す。

コオロギは、「コロコロ」と鳴^ないたり、「リーリーリー」と鳴^ないた
り^ます。スズムシは、そ^の名^なの^とお^り鈴^{すず}のよう^{よう}に、「リンリン」と
鳴^なきます。「ガチャガチャ」とう^るさ^く鳴^なくのはクツワムシ。ま^るで
スイツチがオ^んにな^ったよう^{よう}に「スイツチヨ^ン」と鳴^なき始^{はじ}めるのはウ
マオイ。「リーリーリーリー」と簡^{かん}単^{たん}な鳴^なき方^{かた}をするのはカンタンで
す。い^ろろな音^{おと}色^{いろ}を楽^{たの}しむこ^とがで^きる秋^{あき}の夜^よの草^{くさ}原^{はら}は、ま^さに
地^ち球^{きゅう}のコンサ^{ート}会^{かい}場^{じょう}です。

言葉^{ことば}の森^{もり}長^{ちやう}文^{ぶん}作^{さく}成^{せい}委^い員^{いん}会^{かい} (一)



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

生きているものには、すべて寿命があります。しかし、生物の体を作っている細胞のレベルで考えると、実は寿命がないのです。

例えば、アメーバは、自分の体を分裂させながら増えていきます。栄養がよいと、自分の体の一部を分裂させて、自分を増やしていきます。

このアメーバのような増え方をしている生物は、たまたま一つの個体が死んでも自分の分身は生きていますから、死んだことにはなりません。

実は人間にも、同じようなことが言えます。人間はアメーバのように分裂して増えるわけではありませんが、自分の細胞の一部を子供に伝えて生きています。だから、子供は、お父さんやお母さんに似ているのです。

このように細胞は無限に生き続けていきますが、人間の個体には寿命があります。どうして、このような寿命があるのかはわかりませんが、この理由は次のように考えることができるかもしれません。例えば、もし何百年間も壊れない自動車があつたらどうでしょう。古くなって、いろいろ改良したいところが出てきても、いつまでもその古い車に乗り続けなければなりません。物は壊れるから、また新しいものを作ることができるのです。

プラスチックは、人間が人工的に作ったものです。そのプラスチックの特徴は、腐りにくいことでしたが、その腐りにくさのためにいつまでも自然の中に残り環境を汚染するようになりました。壊れないものばかりで世の中ができていけると、新しいものが登場できなくなるのです。

生物も似ています。寿命があるから、新しい生物が生まれ、その新しい生物が古い生物のできなかつたことをできるようにしていくのです。

アメーバと同じような生き物にゾウリムシがいます。このゾウリムシは、栄養状態のよいときに自分を分裂させて増えていきます。しかし、七百年ぐらゐ分裂を繰り返すと、それ以上の分裂はできなくなり、突然すべてのゾウリムシが死んでしまいます。そうならないように、ゾウリムシはときどき別のゾウリムシと結婚して、今までの自分とは違う新しい子孫を作ります。と言ってももちろん、ゾウリムシがゲタムシやサングラムシになるわけではありません。ゾウリムシのまま新しい性質を手に入れるのです。

寿命があるということは、新しいものを生み出す条件だと言えるのかもしれない。

言葉の森長文作成委員会（M）



読解問題 10月4週分

問1 読解マラソン 集 1 番「ヘレンは一歳半のころ」を読んで次の問題に答えましょう。

正しいものを選び、番号の数字を書きなさい。

▼1 ヘレンは、声を出すことも、正しく話をすることもできなかった ▼2 ヘレンは、声を出すことも、他人の話を聞くこともできなかった ▼3 ヘレンは、声を出すことはできたが、正しく話をすることができなかった ▼4 ヘレンは、他人の話を聞くことはできたが、正しく話をすることができなかった

問2 読解マラソン 集 1 番「ヘレンは一歳半のころ」を読んで次の問題に答えましょう。

正しいものを選び、番号の数字を書きなさい。

▼1 サリバン先生は、ヘレンの手を自分のくちびるにあてがって、「ウォーター」と発音した ▼2 サリバン先生は、自分の胸をおさえつつ、「ウォーター」と発音した ▼3 サリバン先生は、ヘレンのくちびるに手をあてがって、「ウォーター」と発音した ▼4 サリバン先生は、ヘレンのほおをなせたあと、「ウォーター」と発音した

問3 読解マラソン 集 2 番「急いで食べると」を読んで次の問題に答えましょう。

正しいものを選び、番号の数字を書きなさい。

▼1 私たちののどのおくは、空気の通る道と食べ物を通る道がひとつになっている ▼2 私たちののどのおくは、鼻や口から入った空気の通る道が二つある ▼3 私たちののどのおくは、空気の通る道が胃につながっている ▼4 私たちののどのおくは、肺への道と胃への道の二つに分かれている

問4 読解マラソン 集 2 番「急いで食べると」を読んで次の問題に答えましょう。

正しいものを選び、番号の数字を書きなさい。

▼1 イルカやクジラには、鼻がない ▼2 イルカやクジラの鼻の穴は、水中で閉じる ▼3 イルカやクジラの鼻は、水が入っても平気である ▼4 イルカやクジラは、耳の穴も閉じることができる

問5 読解マラソン 集 3 番「牛乳から生まれたチーズ」を読んで次の問題に答えましょう。

正しいものを選び、番号の数字を書きなさい。

▼1 チーズから生まれた牛乳は、世界中で飲まれている ▼2 チーズは、牛乳よりも長い期間保存することができる ▼3 チーズは、持ち運びには不便だが、栄養は豊富である ▼4 チーズは、多くの科学者の研究によって生まれた

問6 読解マラソン 集 3 番「牛乳から生まれたチーズ」を読んで次の問題に答えましょう。

正しいものを選び、番号の数字を書きなさい。

▼1 大豆を生のまま俵につめると、モヤシができた ▼2 武士は、納豆が好きなので、よく戦場に持っていった ▼3 納豆は、煮た大豆を俵につめたらできた ▼4 昔、納豆は、武士しか食べられなかった

問7 読解マラソン 集 4 番「大きな赤いハサミを」を読んで次の問題に答えましょう。

正しいものを選び、番号の数字を書きなさい。

▼1 アメリカザリガニは、アメリカからペットとして輸入された ▼2 アメリカザリガニは、ウシガエルをよく食べる ▼3 アメリカザリガニは、ウシガエルの餌にするために、アメリカからただでもらってきた ▼4 アメリカザリガニは、もともとは日本にすんでいなかった

問8 読解マラソン 集 4 番「大きな赤いハサミを」を読んで次の問題に答えましょう。

正しいものを選び、番号の数字を書きなさい。

▼1 エビやカニの中には、脱皮しないものもある ▼2 アメリカザリガニは、仲間どうしではけんかしない ▼3 エビやカニの仲間、手や足を再生することができる ▼4 人間には、怪我をもとに戻す力はない

読解問題 11月4週分

問1 読解マラソン 集 5 番「梅雨の季節になると」を読んで次の問題に答えましょう。
正しいものを選び、番号の数字を書きなさい。

- ▼1 カタツムリは、貝の仲間である ▼2 カタツムリは、からっとさわやかに晴れた日が好きだ ▼3 カタツムリは、暑い日は水の中に隠れてじっとしている ▼4 カタツムリは、夏の間は起きているが、冬になると冬眠する

問2 読解マラソン 集 5 番「梅雨の季節になると」を読んで次の問題に答えましょう。
正しいものを選び、番号の数字を書きなさい。

- ▼1 カタツムリには、オスとメスの区別がある ▼2 カタツムリは、メスばかりである ▼3 卵からかえったカタツムリにも殻がある ▼4 カタツムリを殻から出すとナメクジになる

問3 読解マラソン 集 6 番「画用紙と色鉛筆」を読んで次の問題に答えましょう。
正しいものを選び、番号の数字を書きなさい。

- ▼1 山は、一年中緑色である ▼2 山は、秋になるとますます緑が深くなる ▼3 紅葉狩りとは、落ち葉を集めて焼き芋を作ることである ▼4 秋になると、いちょうの葉は黄色になる

問4 読解マラソン 集 6 番「画用紙と色鉛筆」を読んで次の問題に答えましょう。
正しいものを選び、番号の数字を書きなさい。

- ▼1 どんな木も、冬になると葉を落とす ▼2 木には、冬になると葉の落ちる木と落ちない木とがある ▼3 葉の落ちない木は、あたたかい地方に多い ▼4 落葉樹は、冬になると葉が重くなるので落葉する

問5 読解マラソン 集 7 番「インドという暑い国に」を読んで次の問題に答えましょう。
正しいものを選び、番号の数字を書きなさい。

- ▼1 インドには昔、カルカッタという国があった ▼2 インドは、貧富の差が大きい国だ ▼3 インドは、どの人も貧しい暮らしをしている ▼4 インドでは、外国人だけが豊かな暮らしをしている

問6 読解マラソン 集 7 番「インドという暑い国に」を読んで次の問題に答えましょう。
▼1 地球上には、もう貧富の差はほとんどない ▼2 少年は、ひとりでマザーテレサのもとにお金を届けに行った ▼3 少年の両親は、マザーテレサにお金を送った ▼4 少年の両親は、少年と一緒にマザーテレサのもとに行った

問7 読解マラソン 集 8 番「どこの水族館でも」を読んで次の問題に答えましょう。
正しいものを選び、番号の数字を書きなさい。

- ▼1 イルカは、魚の仲間である ▼2 イルカは、水の中でも呼吸ができる ▼3 イルカの頭の上には、呼吸するための穴がある ▼4 イルカは、呼吸をしなくても生きていける

問8 読解マラソン 集 8 番「どこの水族館でも」を読んで次の問題に答えましょう。
正しいものを選び、番号の数字を書きなさい。

- ▼1 夜になると、イルカは海の底で眠る ▼2 イルカは、深くもぐるときは呼吸しながらもぐる ▼3 イルカの仲間には、今も地上を歩いているものがある ▼4 イルカは、ゆっくり泳ぎながら寝ている

読解問題 12月4週分

問1 読解マラソン 集 9番「カタツムリとナメクジは」を読んで次の問題に答えましょう。
正しいものを選び、番号の数字を書きなさい。

- ▼1 カタツムリの殻は、ヤドカリのようにだれかからもらったものだ ▼2 カタツムリの殻から体を出すとナメクジになる
▼3 ナメクジは、明るいときにしか行動しない ▼4 ナメクジは、海に住んでいたころには殻があった

問2 読解マラソン 集 9番「カタツムリとナメクジは」を読んで次の問題に答えましょう。
正しいものを選び、番号の数字を書きなさい。

- ▼1 ナメクジは、塩では小さくなるが、砂糖やこしょうでは小さくならない ▼2 塩をかけても、ナメクジはとけていなく
なってしまうわけではない ▼3 塩をかけて小さくなったナメクジは、もう二度と大きくなるしない ▼4 カタツムリは海の中
の生き物だったが、ナメクジは最初から陸上にいた

問3 読解マラソン 集 10番「地震、雷、火事、おやじ」を読んで次の問題に答えましょう。
正しいものを選び、番号の数字を書きなさい。

- ▼1 「地震、雷、火事、おやじ」の「おやじ」とは強い風のことだ ▼2 地面や海面近くの湿った空気は、水をたくさんふ
くみ、あたたまと下にたまる ▼3 積乱雲の上の方では、水分が氷になりそれが雷になる ▼4 氷が雲の中を落ちて
いくとき、大きい音がする

問4 読解マラソン 集 10番「地震、雷、火事、おやじ」を読んで次の問題に答えましょう。
正しいものを選び、番号の数字を書きなさい。

- ▼1 雲の大きさと雷の大きさは関係がない ▼2 雲の下にたまった電気がプラスになると大きな音と光が出る ▼3
雷の中には、雲から雲へ飛んでいくものもある ▼4 雲の上の方にあるプラスの電気は雷にはならない

問5 読解マラソン 集 11番「暑かった夏も」を読んで次の問題に答えましょう。
正しいものを選び、番号の数字を書きなさい。

- ▼1 日本語を使っている人は、自然の音を左脳で聞く ▼2 左脳は言葉を理解する脳なので、虫の音も雑音のように聴こえる
▼3 英語など欧米の言葉は自然の音を音楽のように気持ちよく聴く ▼4 コオロギ類は鳴くが、キリギリス類は鳴かない

問6 読解マラソン 集 11番「暑かった夏も」を読んで次の問題に答えましょう。
▼1 クツワムシは、コオロギ類の虫である ▼2 コオロギ類は、オスもメスも鳴き羽を持っている ▼3 虫が鳴くのは、オ
スを呼ぶためである ▼4 オスは、自分の縄張りを他のオスに知らせるために鳴くこともある

問7 読解マラソン 集 12番「生きているものには」を読んで次の問題に答えましょう。
正しいものを選び、番号の数字を書きなさい。

- ▼1 アメーバは、栄養が悪いと自分の体を分裂させて増える ▼2 人間は、自分の細胞の一部を子供に伝える ▼3 人間
も、アメーバのように分裂して増える ▼4 細胞には寿命があるが、人間の個体には寿命がない

問8 読解マラソン 集 12番「生きているものには」を読んで次の問題に答えましょう。
正しいものを選び、番号の数字を書きなさい。

- ▼1 プラスチックは、自然の土によって作られた ▼2 プラスチックの特徴は、環境を破壊しないことだ ▼3 ゾウリム
シは七百度ぐらい分裂を繰り返すと死んでしまう ▼4 ゾウリムシは、ゲタムシやサンダルムシになることがある

10～12月

小1	コード： nane パ	小2	コード： nane パ	小3	コード： nane パ
ス：		ス：		ス：	
PDF		PDF		PDF	
小4	コード： nane パ	小5	コード： nane パ	小6	コード： nane パ
ス：		ス：		ス：	
PDF		PDF		PDF	
中1	コード： nane パ	中2	コード： nane パ	中3	コード： nane パ
ス：		ス：		ス：	
PDF		PDF		PDF	
高1	コード： nane パス	高2	コード： nane パス	高3	コード： nane パス

ス：
[PDF](#)

ス：
[PDF](#)

ス：
[PDF](#)